

Title	大学全入時代における高校生の進路意識
Author(s)	西田, 亜希子
Citation	大阪大学教育学年報. 2005, 10, p. 89-102
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7016
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大学全入時代における高校生の進路意識

西 田 亜希子

【要旨】

日本の高校生をとりまく状況はかわった。まず、高校卒業後の就職率がきわめて低くなった。それとは逆に、進学率、とくに大学進学率が高くなり、高校生の約半数が高等教育機関に進学するようになった。もはや大学全入時代といえる状況になっているのである。こうした状況は、高校生に変化を与えている。

本稿の主な知見は以下のとおりである。

- (1) 成績がよくない生徒でも、進学を希望するようになった。その結果、予定する進路が影響するといわれていた、高校生の進路に関する意識を変化させた。
- (2) 希望進路別に見ても、勉強や学校生活の適応はあまり差がみられなくなった。
- (3) 進学を希望している生徒でも、就職を希望している生徒でも、おなじ進路選択理由を選んでいった。それは「やりたいことをみつけないから」といった理由だった。そんな結果を反映するように、将来つきたい職業は「ない」と答えるものが多かった。

進路構造の変化は、トラッキングの働きを弱め、高校ランクに応じた社会的地位を配分する働きを弱めた。高校はノン・エリートであるという敗者の烙印を押さなくなったため、高校生の適応はよくなった。しかしながら、高校は、エリートであるという勝者のラベリングもしなくなった。また、高校生自身も、さまざまなメッセージから、エリートであることよりも、自己実現をすること（ふさわしい仕事につくこと）を求めている。その結果、高校生は将来展望を描きにくくなっている。これは大学全入時代ならではの問題といえよう。

1. 問題意識

高校生の進路意識の形成をみるときに、欠かせない視点は高校間格差だった。「複線型学校システムのように法制的に生徒の進路を限定することはないにしても、実質的にはどのコース（学校）に入るかによってその後の進路選択の機会と範囲が限定される」（藤田 1980）と認識されてきたのである。そうした機会と範囲の限定は、人材を選抜、配分するだけでなく、コースの先の進路にふさわしい、価値観や行動を身につけさせる、社会化機能も備わっていることが実証的に明らかにされてきた（米川 1978、武内 1983）。

そのような大きな働きをもつ高校間格差は、主にその高校の進学実績という外在的な要因によって規定されてきた（菊地 1986）。つまり高校間格差の序列をあらわす、「高校ランク」、「学校ランク」、「学校タイプ」などは、呼び方は違ってもすべてその高校の進学率を間接的に表すコトバだったといえる。

だが、その進学率に関わる、高校生をとりまく状況は、大きく変わってきている。高校卒業後の進路別状況を見ると、まず高卒の就職率は悪化している。就職率はここ約30年間下がる一方である。平成15年現在では過去最低の就職率を記録し、16.6%となっている。それと反対に、進学率は、急上昇している。大学・短大・専門学校をあわせた進学率は、平成15年現在で63.5%にもものぼっている。高校卒業後の進学率は、これまで経験もしたことのないような水準にある、といえる。そのうち、大学・短大といった高等教育に限ってみると、特にここ10年での進学率の伸びは著しく、約10ポイント上昇しており、平成15年現在の大学・短大の進学率だけで49.0%を記録している。大学・短大だけでも、高校生のほぼ半数の進路を占めているのである。この背景には、まず高等教育を拡大する政策がとられたことで、大学が増設され、大学定員枠が上げられたことがある。そしてそこに少子化による、18歳人口が減少が重なった。文部科学省は2004年7月に、大学・短大に進学を希望する志願者の数と、国内の全大学・短大への入学者の総計が同数になる「大学全入時代」のおとずれは2007年度になるとの試算を、中央教育審議会大学分科会の審議資料として提示した。しかし、これはあくまで数字上の計算である。もうすでに、一部の大学では定員割れは生じている。選びさえしなければ、機会の上では、大学全入時代を迎えているのである。

こうした変化は、高校生の進路に関する意識に大きな影響を与えていると考えられる。そこで本研究では、進学率が約5割ときわめて高く、かつ私大の約3割が新入生の定員割れをおこしていた¹⁾ 2001年度のデータを用い、高校生の希望進路を切り口として分析を行う。高校間格差ではなく、希望進路を用いる理由のひとつは、先に述べたように、高校間格差は主に進路実績に基づいて規定されており、間接的なためである。もうひとつは、希望進路という意識のほうが、生徒にとってはより可視的で、直接的に作用すると考えられるためである。たとえば、生徒は希望する進路にあわせて、選択する科目を選んだり、クラスを編成されたりする。希望進路は、実際の高校生活において、意識される機会が多いと考えられる。

分析の手続きは以下の通りである。まず第2節において、大学全入時代の高校生は、どのような進路を考えているのか高校生全体の状況を概観する。そして、「高校ランク」や学内成績によって進路分化の違いがどのようになっているのか現状を把握し、本当に「大学全入時代」となっているのか、本論の前提を検証する。つぎに第3節・第4節で、進路による社会化作用が働いているのかどうかを検証する。用いる変数は、とくに進学希望と関連が深いと考えられる勉強に関する意識や勉強時間、学校適応に関する項目である。続く第5節で、進路を希望する理由についてそれぞれ確認する。さいごに第6節において、進学可能性を基盤として形成されるといわれる、将来の職業希望について考察する。

1. 1 調査の概要と分析の手続き

今回使用するデータは、2001年3月に、6府県においてとられた「高校生の生活意識に関する調査」（大阪大学人間科学研究科教育計画論講座が実施）である。サンプル高校は17校で、すべて公立高校だった。その地域のいわゆるトップ進学校から、底辺校までを対象にした。高校1・2年生を対象とし、有効回答数は3069人である。その県別の内訳は、山梨県1校121名、大阪府8校1180名、奈良県2校251名、福岡県2校516名、長崎県2校648名、鹿児島県2校353名である。学科・コースは多様であるため、授業内容に応じ「普通科」「英語科」「農業系学科」「産業系学科」の4つに大別した。その内訳は、普通科74.1%、英語科3.4%、農業系学科4.4%、産業系学科18.1%である²⁾。調査方法は集合調査法で、すべてホームルームか他の授業時間において、各高校の教師によって配布・実施された。

2. 現代高校生の考える進路

まず、本データの高校生はいま高校卒業後どのような進路をとろうと考えているのかを確認したが、表1-1である。おおまかにみると、進学希望の生徒—大学、短大、専門・各種学校を足しあわせた割合—は約7割にもものぼる。次に多いのが就職希望の生徒で、約2割である。よく取り沙汰されるフリーター希望の生徒は、1.6%しかいない。進学と就職だけで、全体の95%以上の割合を占めていることから、彼らが希望する進路は、ほぼこの2つであるといつてよいだろう。

進学先別にしてみると、もっとも多いのは大学希望で、約4割。その内訳は、一般入試による大学進学を考えているもの(以下、大(一般)と略)が、約3割。推薦入試による大学進学を考えているもの(以下、大(推薦)と略)は比較的多く、約1割となっている。進学希望者の中で、次いで多いのは専門・各種学校希望(以下、専・各と略)で、約2割。逆にもっとも少ないのは、短大希望で1割を切っている。

表1-1 高校生が高校卒業後に考えている進路

進路	%	累積%	単位: % (N)
大(一般)	32.7	32.7	(1004)
大(推薦)	9.3	42.0	(285)
短大	7.3	49.3	(225)
専門・各種	21.6	70.9	(662)
就職	23.8	94.7	(731)
家事手伝い	0.4	95.1	(11)
フリーター	1.6	96.7	(50)
その他	1.9	98.6	(58)
D.K., N.A.	1.4	100.0	(43)
計(N)	100	100.0	(3069)

2. 1 希望進路別にみた成績

ではどのような高校生が、それぞれの進路を選んでいるのだろうか？はじめに述べたように、「高校間格差」を規定していた高校卒業後の進路構造は大きく変わっている。そこで、進路希望に高校間格差がみられるかどうかをみたのが表2-1である。大(一般)の割合が「高校ランク」ⅠからⅤ³⁾になるに従って大幅に少なくなっていることや、それとは逆に専・各や就職希望が増えていることなどに目がいくが、注目すべきは、進学希望の大きな広がりである。従来はほとんどが就職する高校で、非・進学校だったランクⅤにおいても、大学希望が大(一般)と大(推薦)をあわせると1割以上いる。専・各もあわせれば、ランクⅤの進学希望者は4割近くにものぼっている。ここではあくまで希望の回答であることを留意しても、従来の傾向から考えると、かなり大きな変化である。ランクⅤにおいてこれだけ進学希望者が多いということは、学力が低い層も進学するようになってきていることを窺わせる。また大(推薦)の割合の高さも注目すべき点である。ほとんどが大(一般)を希望するランクⅠでは1.7%しかいないものの、ランクⅡからⅣでは一定数が存在する。具体的にみると、ランクⅡもⅢも10.9%、ランクⅣは10.4%、ランクⅤは7.0%おり、ほぼ1割前後の割合を示している。

表2-1 「高校ランク」別に見た 高校卒業後に考えている進路

進路 ランク	大 (一般)	大 (推薦)	短大	専・各	就職	フリーター	その他	D.K.N.A	計(N)
Ⅰ	94.6	1.7	0.0	1.4	1.0	0.0	1.0	0.3	100.0(296)
Ⅱ	64.0	10.9	8.5	9.7	3.1	0.4	1.6	1.9	100.0(258)
Ⅲ	29.1	10.9	9.7	24.6	20.7	1.6	2.2	0.8	100.0(1644)
Ⅳ	17.0	10.4	7.9	32.5	26.2	2.2	2.8	0.3	100.0(317)
Ⅴ	4.7	7.0	3.4	22.7	53.6	2.9	3.1	2.0	100.0(554)
計(N)	32.7	9.3	7.3	21.6	23.8	1.6	2.2	1.0	100.0(3089)

$$\chi^2(24)=36.283 \quad p=0.052$$

(注) χ^2 値はD.K.、N.A.を除いて計算した。以下の表2-2から表5-1まですべて同様。

そこで、推薦を希望する生徒はどんな生徒なのか、「高校ランク」別に、とくに成績の点をみたものが、次の表2-2である。大(推薦)の成績分布を、まずランクⅡからみてみよう。成績が「下」と答えるものの割合から、「上」と答えるものの割合まで順に追っていくと、14.3%→21.4%→35.7%→14.3%→14.3%となっている。同じように見ていくと、ランクⅢでは7.2%→20.0%→35.0%→32.2%→5.6%。ランクⅣでは3.0%→9.1%→36.4%→42.4%→9.1%。ランクⅤでは2.6%→12.8%→20.5%→51.3%→12.8%である。どのランクでも、成績が中や中の下と答えるものも多く希望している。推薦入試というと、内申書が必要であり、学内成績が大きな意味をもつと考えられる。だが、成績のよい生徒だけが希望しているわけではない。ランク別に、成績と進路希望の相関係数(イータ)⁴⁾をランクⅠからⅤの順にみると.19→.14→.15→.27→.23となっており、ばらばらである。ランクに応じた相関はないといえる。ランクが高いほど、成績が進学の規定因になるといったことはない。こうしたことは、入試が多様化し、学力による選抜ばかりに頼らなくてよいことを反映していると考えられよう。

大(一般)も同様で、その進路を選んだ生徒の成績の分布はほぼ正規分布を描いている。高校間格差のように、大学間にも格差はあり、ランクⅠの生徒が進学したいと思っている大学と、ランクⅤの生徒が進学したいと思っている大学は違うであろう。とはいえ、ふつう一般入試は、学力によるペーパーテストを行う、業績主義的選抜である。そのことから考えると、どのランクにおいても成績の悪い生徒も希望していることは、驚くべきことである。

表2-2 「高校ランク」別に見た 高校卒業後に考えている進路 の 学内成績分布

単位: %

成績		高校ランク・進路						計 (N)
		下	中の下	中	中の上	上	D.K., N.A.	
I	大(一)	18.9	26.1	30.4	17.9	6.8	0.0	100.0 (280)
	大(推)	0.0	0.0	20.0	40.0	40.0	0.0	100.0 (5)
	専門	75.0	0.0	25.0	0.0	0.0	0.0	100.0 (4)
	就職	66.7	0.0	33.3	0.0	0.0	0.0	100.0 (3)
	その他	33.3	33.3	0.0	0.0	33.3	0.0	100.0 (3)
	D.K., N.A.	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0 (1)
	小計(N)	20.3	25.0	29.7	17.6	7.4	0.0	100.0 (296)
II	大(一)	18.2	26.7	32.7	17.0	4.8	0.6	100.0 (165)
	大(推)	14.3	21.4	35.7	14.3	14.3	0.0	100.0 (28)
	短大	13.6	40.9	22.7	22.7	0.0	0.0	100.0 (22)
	専門	40.0	20.0	28.0	8.0	0.0	4.0	100.0 (25)
	就職	25.0	37.5	12.5	25.0	0.0	0.0	100.0 (8)
	フリーター	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0 (1)
	その他	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	100.0 (4)
	D.K., N.A.	40.0	0.0	40.0	0.0	0.0	20.0	100.0 (5)
小計(N)	20.5	26.4	31.4	15.9	4.7	1.2	100.0 (258)	
III	大(一)	11.1	20.7	37.2	21.7	8.8	0.6	100.0 (479)
	大(推)	7.2	20.0	35.0	32.2	5.6	0.0	100.0 (180)
	短大	11.9	35.8	41.5	7.5	3.1	0.0	100.0 (159)
	専門	14.6	26.5	39.1	16.6	2.5	0.7	100.0 (404)
	就職	19.7	26.2	28.5	21.5	4.1	0.0	100.0 (340)
	フリーター	23.1	26.9	30.8	7.7	7.7	3.8	100.0 (26)
	その他	16.7	22.2	33.3	19.4	8.3	0.0	100.0 (36)
	D.K., N.A.	15.0	20.0	20.0	10.0	30.0	5.0	100.0 (20)
小計(N)	13.7	24.8	35.6	19.8	5.6	0.5	100.0 (1644)	
IV	大(一)	11.1	13.0	37.0	33.3	5.6	0.0	100.0 (54)
	大(推)	3.0	9.1	36.4	42.4	9.1	0.0	100.0 (33)
	短大	4.0	32.0	32.0	32.0	0.0	0.0	100.0 (25)
	専門	16.5	14.6	36.9	24.3	5.8	1.9	100.0 (103)
	就職	20.5	33.7	28.9	10.8	3.6	2.4	100.0 (83)
	フリーター	28.6	71.4	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0 (7)
	その他	22.2	33.3	33.3	11.1	0.0	0.0	100.0 (9)
	D.K., N.A.	66.7	0.0	33.3	0.0	0.0	0.0	100.0 (3)
小計(N)	15.1	21.8	33.4	23.7	4.7	1.3	100.0 (317)	
V	大(一)	11.5	7.7	23.1	38.5	19.2	0.0	100.0 (26)
	大(推)	2.6	12.8	20.5	51.3	12.8	0.0	100.0 (39)
	短大	10.5	31.6	36.8	21.1	0.0	0.0	100.0 (19)
	専門	19.8	17.5	29.4	22.2	7.9	3.2	100.0 (126)
	就職	18.9	24.6	27.9	16.8	11.1	0.7	100.0 (297)
	フリーター	37.5	6.3	31.3	12.5	6.3	6.3	100.0 (16)
	その他	29.4	11.8	17.6	23.5	17.6	0.0	100.0 (17)
	D.K., N.A.	7.1	28.6	7.1	21.4	35.7	0.0	100.0 (14)
小計(N)	17.9	20.8	27.1	21.8	11.2	1.3	100.0 (554)	
合計(N)	15.8	23.9	32.9	20.0	6.6	0.7	100.0 (3069)	

ランク I $\chi^2(16)=8.535$ $p=.931$ ランク II $\chi^2(24)=29.105$ $p=.216$ ランク III $\chi^2(24)=28.893$ $p=.224$ ランク IV $\chi^2(24)=20.970$ $p=.640$ ランク V $\chi^2(24)=30.521$ $p=.168$

さらに次の表2-3で、「学校の授業がよくわかる」と答えるものの割合を、希望進路別にみてみよう。「まったく当てはまらない」と思っている割合は、進学希望者でも就職希望者でも大きな差はない。こうしたことから、非・進学である就職を選ぶ生徒や、進学の中でも無選抜の入試状態に近い短大や専・各学校を希望する生徒は、決して勉強への落ちこぼれ感があって、その進路を選んでいるわけではない、ということがいえるだろう。

表2-3 高校卒業後に考えている進路 と 学校の授業がよくわかる

単位:%

わかる 進路	とても 当てはまる	やや 当てはまる	あまり当て はまらない	まったく当て はまらない	D.K. N.A	計 (N)
大(一般)	8.0	42.6	40.4	8.8	0.2	100.0 (1004)
大(推薦)	11.2	48.1	34.4	5.3	1.1	100.0 (285)
短大	2.7	33.8	53.3	10.2	0.0	100.0 (225)
専・各	4.1	38.4	43.1	14.2	0.3	100.0 (662)
就職	6.0	38.6	41.3	13.8	0.3	100.0 (731)
フリーター	8.0	24.0	48.0	20.0	0.0	100.0 (50)
その他	8.7	31.9	36.2	23.2	0.0	100.0 (69)
D.K. N.A	9.3	30.2	30.2	25.6	4.7	100.0 (43)
計(N)	6.6	39.9	41.5	11.7	0.4	100.0 (3069)

$\chi^2(18)=14.196$ $p=.716$
eta係数.102

一般的に考えられているように、成績が良い生徒は進学を希望し、成績が悪い生徒は進学しない（つまり就職を希望する）という図式は見受けられない。また、就職が高校の斡旋によるからといって、就職希望者の成績がよいわけでもない。従来のように、学力で進路が限定されることはないのである。たしかに「大学全入時代」がおとずれているということがいえるだろう。

3. 希望進路別にみた高校生の特性

では、進路別にみると、「勉強」への適応や、学校生活への適応は、どのようになっているのだろうか？順次そのデータを確認してみよう。

3. 1 「勉強」に対する意識—意識面からみた「勉強」への適応

まず表3-1「勉強ができなくても、とくに困ることはない」で、高校での勉強を大事と思っているかどうかには差があるかみてみよう。全体的な傾向は賛成と反対は半々である。大(一般)から就職希望までそれぞれ細かくみても、とても思うものは1割前後、やや思うものは4割前後であり、差は見受けられない。

表3-2の「テストの点さえよければよい」も同様にみてみよう。これは勉強すること自体に意味を見出すかどうかを問う質問といえる。全体で見ると、あまりとまったくをあわせるると7割もの生徒が反対している。進学希望から就職希望までをみると、これもあまり差がない。勉強のテスト結果だけは大事だけれど、内容は理解できなくてもよいと、「とても思う」ものは5%前後。「やや思う」ものは就職希望者では26.3%と他の進路よりすこし高いが、ほかは2割前後である。「あまり思わない」ものは5割前後、「まったく思わない」ものは大(一般)では若干高く29.8%だが、ほかは2割前後となっている。意外なことに、進学希望者と就職希望者の勉強観の差は小さい。進路によって、勉強への意味付けは、ほとんどかわらないといえる。

表3-1 高校卒業後に考えている進路 と 勉強ができなくても、とくに困ることはない
単位: %

進路 \ 困らない	とても 思う	やや 思う	あまり 思わない	まったく 思わない	D.K., N.A	計 (N)
大(一般)	9.9	37.9	42.9	9.2	0.1	100.0 (1004)
大(推薦)	14.7	36.5	39.6	8.4	0.7	100.0 (285)
短大	8.4	41.3	37.8	11.6	0.9	100.0 (225)
専・各	10.1	37.8	42.1	9.2	0.8	100.0 (662)
就職	10.3	39.4	38.4	11.4	0.5	100.0 (731)
フリーター	22.0	32.0	38.0	8.0	0.0	100.0 (50)
その他	10.1	40.6	40.6	8.7	0.0	100.0 (69)
D.K., N.A.	7.0	39.5	32.6	4.7	16.3	100.0 (43)
計(N)	10.6	38.4	40.6	9.9	0.5	100.0 (3069)

$$\chi^2(18)=15.380 \quad p=.636$$

表3-2 高校卒業後に考えている進路 と
内容をきちんと理解できなくても、テストの点数さえよければよい
単位: %

進路 \ 点さえ	とても 思う	やや 思う	あまり 思わない	まったく 思わない	D.K., N.A	計 (N)
大(一般)	5.2	17.6	47.3	29.8	0.1	100.0 (1004)
大(推薦)	8.4	18.6	52.3	20.7	0.0	100.0 (285)
短大	4.9	22.2	60.0	12.9	0.0	100.0 (225)
専・各	7.4	25.8	49.2	17.2	0.3	100.0 (662)
就職	10.1	26.3	47.1	16.6	0.0	100.0 (731)
フリーター	8.0	30.0	46.0	16.0	0.0	100.0 (50)
その他	13.0	17.4	44.9	24.6	0.0	100.0 (69)
D.K., N.A.	15.2	17.9	41.2	19.6	6.3	100.0 (43)
計(N)	7.5	22.1	48.8	21.2	0.3	100.0 (3069)

$$\chi^2(18)=20.116 \quad p=.326$$

3. 2 勉強するかどうか—行動面からみた「勉強」への適応

だが、実際の行動をみると、多少様相が異なる。まずは家庭学習時間(表3-3)から見てみよう。修学年限の長い進学先を希望するものほど勉強する傾向が認められた⁵⁾。もっとも勉強しているのではないかと考えられる、大(一般)の平日の家庭学習時間をみてみると、2時間以上勉強しているものの割合は他の進路に比べて最も多く、24.5%おり、非常に多くいる。しかし、学力選抜のきびしい進路を選ぶ生徒ほど勉強しているとは一概にはいえない。高校生の家庭学習時間の減少は、荻谷(2002)などによる先行研究でも盛んにいわれている。本データにおいても、たしかに全体的にそうであるということが確認できる。大(一般)で家庭学習が0分、とこたえているものも32.4%いる。これは他の進路、とくに就職などと較べると低い割合のようにみえるが、ほとんど試験が無選抜状態に近いといわれる短大や専・各希望の生徒でも5割前後は1分以上家庭で学習していることを考えると、大(一般)全体がきわだって勉強しているとはいえない。さらに1~30分、30分~1時間未満、1時間~2時間未満、でみると、あまり差がないことも確認できる。近年では、大学の一般受験は難易度だけではなく、科目数においても大きな違いがある。そうしたことが、このような差となってあらわれたのではないだろうか。

表3-3 高校卒業後に考えている進路 と 平日の家庭学習時間

単位: %

進路 \ 学習時間	0分	1~ 30分未満	30~ 1時間未満	1時間~ 2時間未満	2時間以上	D.K., N.A	計 (N)
大(一般)	32.4	0.8	9.3	15.8	24.5	17.2	100.0 (1004)
大(推薦)	44.6	1.4	11.2	14.0	13.3	15.4	100.0 (285)
短大	46.2	1.8	7.6	16.4	6.2	21.8	100.0 (225)
専・各	58.5	1.7	7.7	8.0	5.4	18.7	100.0 (662)
就職	62.8	1.0	3.4	6.2	3.4	23.3	100.0 (731)
フリーター	62.0	0.0	4.0	2.0	0.0	32.0	100.0 (50)
その他	60.9	0.0	0.0	7.2	10.1	21.7	100.0 (69)
D.K., N.A.	50.9	0.0	2.7	5.4	8.9	32.1	100.0 (43)
計(N)	48.6	1.1	7.3	11.1	12.0	19.9	100.0 (3069)

$\chi^2(24)=371.517$ $p=0.000$

4 学校生活への適応

現代の「高校」は、高校生にどのように意識されているのだろうか。「高校を中退してもなんとかやっていける」と思うかどうかに対する回答は、「まったくあてはまらない」34.3%、「あまりあてはまらない」34.6%、「ややあてはまる」20.6%、「とてもあてはまる」10.0%であった。高校生は高校を中退したらやっていけない、とかなりの割合が思っていることになる。

やっていけない、と思う理由は何なのか、手がかりとして次の質問をみてみよう。「高校に行かなくても大検(大学入学資格検定)にうかると大学に入れる」という情報を提示した上で、「最終的に学歴が同じになるのであれば、高校に行く必要はない」という考えをどう思うかたずねたところ、表4-1に示されるように、高校生の過半数は反対している。高校生は高校という「学校」にいく必要を強く感じている、といえる。その理由をみると、「高校生活で得られるものは資格だけではないから。(高1・女子)」「16~18歳のあいだの集団生活って必要やと思う。(高2・女子)」「高校生活では、人間関係とかも学べるから行ったほうがいい。(高2・男子)」などが多く上がった。高校生は、学歴だけではなく、学校生活を送ることを非常に高く評価するようになってきているのである。

表4-1 高校卒業後に考えている進路 と 高校に行く必要はない

単位: %

進路 \ 必要ない	とても 当てはまる	やや 当てはまる	あまり 当てはまらない	まったく 当てはまらない	D.K., N.A	計 (N)
大(一般)	16.9	22.6	46.5	12.6	1.3	100.0 (1004)
大(推薦)	20.4	21.1	43.9	10.9	3.9	100.0 (285)
短大	10.2	28.9	51.1	6.2	3.6	100.0 (225)
専・各	19.6	24.2	45.3	7.1	3.8	100.0 (662)
就職	22.3	27.8	37.3	7.4	5.2	100.0 (731)
フリーター	34.0	22.0	26.0	6.0	0.0	100.0 (50)
その他	30.4	20.3	33.3	10.1	5.7	100.0 (69)
D.K., N.A.	23.2	22.3	27.7	7.1	19.6	100.0 (43)
計(N)	19.1	24.5	43.1	9.3	0.0	100.0 (3069)

$\chi^2(18)=18.467$ $p=.425$

そうした学校生活への適応は、かつてはどのような進路を考えているかが大きく影響するといわれていた(米川1978、武内1983)。そこで本章では、学校生活への適応と希望進路の関係を具体的に検証する。

4. 1 希望進路別にみた学校生活の適応

荒牧(2001)は、学業適応面で見ると、高校生は卒業後の進路形成をにらんで、高校において「戦略的」に行動するようになったのではないかと報告している。では学業面以外でも、希望進路は学校生活への適応に影響をおよぼしているのだろうか。それを確かめるため、生徒役割の果たしかたを取り上げてみよう。この生徒役割は、ささいなことのように思われる。だが学校においては常にチェックされて、日常の評価に使われ、ひいては学内の成績や内申書にひびきかねない。そのように考えると、学校生活への適応を示す指標の中では、生徒役割の果たしかたが、どのような進路を希望しているかの影響を受けやすいと考えられる。だが、希望進路別に先生のいうことをきくかどうか、当番の仕事をきちんとするかどうか、をみたところ、差はほとんどみられなかった(表4-2と表4-3)。高校生は、希望する進路によって評価を気にして学校生活を送る、ということはなさそうである。

表4-2 高校卒業後に考えている進路 と 先生に言われたことは必ず守る

単位:%

進路	守る	とても 当てはまる	やや 当てはまる	あまり 当てはまらない	まったく 当てはまらない	D.K., N.A	計(N)
大(一般)		12.5	55.2	28.9	3.4	0.1	100.0 (1004)
大(推薦)		16.8	52.3	27.0	3.5	0.4	100.0 (285)
短大		10.2	55.1	29.8	4.9	0.0	100.0 (225)
専・各		9.4	49.1	34.3	6.9	0.3	100.0 (662)
就職		9.4	46.1	35.8	8.5	0.1	100.0 (731)
フリーター		10.0	30.0	46.0	14.0	0.0	100.0 (50)
その他		15.9	33.3	39.1	11.6	0.0	100.0 (69)
D.K., N.A.		14.3	33.0	38.4	12.5	1.8	100.0 (43)
計(N)		11.3	50.2	32.2	6.0	0.2	100.0 (3069)

$\chi^2(18)=14.759$ $p=0.678$

表4-3 高校高校卒業後に考えている進路 と

給食・掃除・日直など、当番の仕事をきちんとする

単位:%

進路	当番する	とても 当てはまる	やや 当てはまる	あまり 当てはまらない	まったく 当てはまらない	D.K., N.A	計(N)
大(一般)		30.3	44.9	20.2	4.4	0.2	100.0 (1004)
大(推薦)		34.4	42.1	20.0	3.2	0.4	100.0 (285)
短大		24.0	50.2	21.8	3.6	0.4	100.0 (225)
専・各		25.1	42.9	26.3	5.3	0.5	100.0 (662)
就職		22.3	40.4	28.5	8.6	0.3	100.0 (731)
フリーター		12.0	44.0	34.0	10.0	0.0	100.0 (50)
その他		20.3	39.1	33.3	7.2	0.0	100.0 (69)
D.K., N.A.		20.5	32.6	32.6	11.6	2.3	100.0 (43)
計(N)		26.5	43.2	24.3	5.7	0.3	100.0 (3069)

$\chi^2(18)=21.987$ $p=0.233$

4. 2 学校生活の適応別にみた希望進路

学校生活への適応は、どのような進路を希望しているかによって影響をうけるだけではないだろう。逆に、進路希望の形成に影響を及ぼす可能性もある。学校生活に適応的だから、さらに学校生活を送りたいと思ひ、進学を希望する、ということも考えられる。そこで、学校生活の中でも団体活動への積極性や、学校の外の生活とくらべて学校生活が楽しいかどうかと、希望する進路との関係をみた。すると学校生活

対してもっている意識によって、希望する進路には差がみられた。クラブや行事といった団体活動に積極的に参加する生徒ほど大学進学を考えており、消極的な生徒は進学以外の進路を希望している傾向が高かった（表4-4と表4-5）。また、学校の外の生活とくらべると学校の方が楽しい生徒ほど、大学進学を希望する傾向があった（表4-6）。学校生活に適応的な生徒ほど、進学機関の中ではもっともキャンパスライフがおくれる大学を希望するようだ。

従来、進路が社会化作用をもつと考えられてきた。学校生活に関する他の指標を検討して裏付けることが必要だが、高校生にとって学校生活のもつ意味が大きくなったことで、学校生活に適応しているかどうか進路志望の形成に影響を及ぼすようになったという、かつてとは反対の解釈も可能である。

表4-4 クラブに熱心に参加すると高校卒業後に考えている進路

単位:%

進路	大学	短大	専・各	その他	D.K., N.A	計(N)
クラブに参加 とても当てはまる	52.2	8.2	18.6	20.0	1.1	100.0 (807)
やや当てはまる	47.0	7.0	21.3	23.5	1.2	100.0 (600)
あまり当てはまらない	35.8	7.8	25.1	29.7	1.5	100.0 (586)
まったく当てはまらない	35.1	6.4	22.2	35.1	1.3	100.0 (1047)
D.K., N.A.	31.0	13.8	17.2	24.1	13.8	100.0 (29)
計(N)	42.0	7.3	21.6	27.7	1.4	100.0 (3069)

$\chi^2(9)=92.356 \quad p=0.000$

表4-5 行事に熱心に参加すると高校卒業後に考えている進路

単位:%

進路	大学	短大	専・各	その他	D.K., N.A	計(N)
行事に参加 とても当てはまる	48.3	8.4	19.8	22.0	1.5	100.0 (536)
やや当てはまる	43.9	8.5	20.2	26.4	0.9	100.0 (1102)
あまり当てはまらない	40.4	6.0	23.3	28.9	1.4	100.0 (1049)
まったく当てはまらない	32.0	6.0	23.3	36.3	2.4	100.0 (369)
D.K., N.A.	30.8	7.7	23.1	30.8	7.7	100.0 (13)
計(N)	42.0	7.3	21.6	27.7	1.4	100.0 (3069)

$\chi^2(9)=43.053 \quad p=0.000$

表4-6 学校の外の生活のほうが楽しいと高校卒業後に考えている進路

単位:%

進路	大学	短大	専・各	その他	D.K., N.A	計(N)
楽しい まったく当てはまらない	50.9	3.6	18.2	25.5	1.8	100.0 (55)
あまり当てはまらない	53.7	6.2	19.0	20.1	1.1	100.0 (844)
やや当てはまる	40.5	8.3	22.3	27.7	1.1	100.0 (1057)
とても当てはまる	34.1	7.6	23.0	33.7	1.6	100.0 (1099)
D.K., N.A.	35.7	0.0	21.4	21.4	21.4	100.0 (14)
計(N)	42.0	7.3	21.6	27.7	1.4	100.0 (3069)

$\chi^2(9)=85.167 \quad p=0.000$

5. 進路別にみた進路選択理由

それぞれの進路を考えている高校生は、どのように考えてその進路を選んでいるのか、選択肢を提示し、進路理由を3位まで尋ねた。表は紙幅の都合上省略するが、進学希望者の希望理由を1位から3位まであわせた総合ランキングで全体的な傾向をみると以下ようになる。進学希望者では、どの進路でも1位から3位に「なりたい職業につくために必要だから」や「進学先で学びたいことがあるから」があがっていた。それよりは少ないものの「楽しそうだから」も、大学・短大・専・各のどの進路でも一定の割合で見受けられ、4位だった。少ない理由は、「まわりの人が皆進学するから」「家族にすすめられたから」「先生にすすめられたから」といったものである。こうしたことから、進学希望者はそれなりに積極的に、進学を選択していると考えられる。

進路によって違いが出る理由をみてみると、大学・短大希望者内では低位であるものの、専・各希望者に比べて多いのは「やりたいことを見つけるため」、「なんとなく」である。専・各において、大学・短大より多いのは「技術・資格を身につけるため」といった実学的で具体的な理由で、2位にあがっていた。この「技術・資格を身につけるため」は短大希望者でも比較的多くが選び、2位にあがっていた。大学教育の幅広い教育内容、専門学校・短期大学の実学的な教育内容を反映した結果が示されているといえよう。就職希望理由は進路理由と異なる選択肢を用意し、同様に尋ねた。就職希望者の進路選択理由は、「はやく自立・独立したいから」が1位に、「もう勉強したくないから」が3位にあがっていた。「もう勉強したくない」生徒は、勉強に対しての動機付けが低いだろうし、勉強に価値を見出さない就職希望者はこれ以上就学することを忌避し、非・進学である進路を選択していることなどは納得できる。そのほかにも就職希望者に多い理由で、興味深いのが、「やりたいことを見つけるため」で2位であった。就職する高校生にとって就職という進路は、決定的なものではないのである。

6. 進路別にみた職業希望

進路と関わるであろう「将来なろうと思っている職業」をたずねた結果をまとめ、希望進路別にみたのが、表5-1である。それをみると、進学希望者は、進路理由と整合した結果を示している。

表5-1 高校卒業後に考えている進路 と 将来なろうと思っている職業

単位: %

進路	「ある」		「ある」にしているが あいまい		「なし」	D.K., N.A	計 (N)
	具体的に「ある」	「ある」にしているが無記入	「学科の専門をいかした仕事」など	「自分にあつた仕事」など			
大(一般)	47.1	5.1	0.3	0.3	45.5	1.7	100.0 (1004)
大(推薦)	50.9	4.6	1.1	0.4	40.7	2.5	100.0 (285)
短大	57.8	5.8	0.0	0.9	33.8	1.8	100.0 (225)
専・各	66.2	6.5	0.2	0.3	25.2	1.7	100.0 (662)
就職	39.0	3.6	0.5	1.1	53.4	2.5	100.0 (731)
フリーター	40.0	4.0	0.0	0.0	52.0	4.0	100.0 (50)
その他	20.0	5.3	1.4	1.4	72.5	0.0	100.0 (43)
D.K., N.A.	21.0	4.7	0	2.3	55.8	16.3	100.0 (69)
計(N)	49.3	5.0	0.4	0.6	42.6	2.2	100.0 (3069)

$$\chi^2(24)=16.805 \quad p=.857$$

6. 1 職業希望「なし」

専・各希望は具体的な職業名をあげ、「ある」と答えた割合は66.2%と最も多い割合を示している。短大希望では専・各希望より、やや少なくなっている。大学希望ではさらに少なく、「ある」と答えるものは約半数で、その分「ない」と答えるものが多く、4割前後が「ない」と答えている。だが、それ以上に多いのが、就職希望者である。なろうと思っている職業が「ない」と答えるものは53.4%と過半数を超えている。サンプルが高校1・2年生を対象にしていることを差し引いて考えても、かなり多い割合といえる。進学をモラトリアムの動機で選ぶ生徒もいるだろうから、進学希望者において職業希望がないことは納得がいく。だが、そうした進学希望者よりも、目前に職業選択を控えている就職希望者において「ない」と答える割合が高いのは、注目すべき値だろう。

なんらかの対策が必要と考えられるが、高校教育に専門性をもたせることは、解決策にはなりえないだろう。実際、このデータでも、普通科以外の多様な学科・コースからもサンプルをとっているが、学科・コース別にみても、なろうと思っている職業が「ない」と答える割合は大差なかった。どのような学部にも進学が可能となると、高校の専門教育はご破算になってしまう。高卒後の進学がこれほど広がっている、という進路構造を前にしては意味がないのである。進路構造の影響を考慮した、職業教育が考えられる必要があるといえるだろう。そして、その職業教育は『やりたいことを探みなさい』『むいたことを探みなさい』と仕向けるものであってはならない。前節の進路選択理由で確認したように、高校生は、行動しているかどうかはわからないが、心理面ではすでにやりたいことを探す傾向がある。ますます「やりたいこと探し」の迷宮に陥らせないように、その実施に際しては重々注意する必要がある。

6. 2 職業希望「あり」

具体的に職業を記入した回答をみても、専・各希望でもっとも多いのは、医療衛生士や看護師といった医療系の資格職(16.0%)。その次が美容師・メイクアップアーティストなど(10.4%)。3番目が社会福祉に関する仕事となっている(3.9%)。短大希望者が考えている職業でもっとも多いのは幼稚園の先生や保育母(24.0%)。2番目3番目は専・各希望でも多かった、医療系の資格職(12.0%)、社会福祉に関する仕事(5.3%)である。大学希望者についてみても、こうした福祉に関する仕事・医療系の資格職は多い。また小学校・中学校・高校の教師も回答で多く見られた。

職業像は、いま希望する進学先の教育内容を反映してはいるが、それほど大きな差ではない。荒牧(2001)がいうように、どの進路でも自己実現志向が強い職業が多くあがっている。また、それだけではなく、どの進学先を選んでいる高校生でも、いままでふれたことがある職業や、具体的に想像できる職業に就きたいと思う傾向がある。職業希望がないものの傾向とあわせて考えると、これも高校生が職業像をもちにくいことのあらわれといえるだろう。

7. まとめと今後の課題

本稿の知見をまとめると以下ようになる。

まず、進学受け入れ枠の拡大を背景として、進学希望者が、「高校ランク」の上位から下位までみうけられた。進学率や、大学や専門・各種学校の希望割合という区別でみれば、「高校ランク」との序列的対応関係は若干のこっていた。ただし、ランクVにおいても、進学を希望するものが約4割もあり、就職を希望するものは約半数にすぎない。かつて就職校だったランク下位校が、「進路多様校」になっている。こうした結果は、1997年に行われた調査に基づき分析した耳塚(2000)、荒牧(2001)らの知見と一致する⁶⁾。

つぎに進学か就職か、大学か専・各か、といった希望と、成績との関係は弱いということがわかった。こうしたことは、進学受け入れ枠が広がったことによる競争の緩和、学力のみによらない多様な入試制度の登場が影響していると考えられる。

そして、進路による社会化作用は弱いことが確認された。希望進路別にみても、学校適応には差がなかった。逆に、学校適応の違いによって、希望進路に差がみられた。ただし、学校適応といっても本稿で検

証した以外の項目がさまざまあるので、この結果には留意が必要ではある。

さいごに、進路を希望する理由をみると、進路先の特色を反映した違いもあったが、どの進路でも「やりたいことをみつけるため」という理由があがった。そんな結果を反映するように、将来つきたい職業は「ない」と答えるものが多かった。「ある」と答えるものをみても、どの進路でも、福祉の仕事や教師、美容師といった、身近で、どんな仕事かイメージのできる職業があがるという点で差がなかった。

希望する進路からみると、高校をとりまく状況、とくに大学入試の選抜システムの変動が、高校生に影響を及ぼしていることが明らかとなった。大学全入時代という構造は、高校生の進路に関する意識をたしかに変容させていた。大学進学率の高まりは、高校の地位配分機能を、ある意味弱めている。多くが大学進学をすることで、高校間に差がつきにくくなったのである。高校はかつてのように、敗者のレッテルを貼ることはなくなった。同時に、高校はエリートであるという勝者のラベリングもしなくなったのである。今の高校生は、自らの立ち位置から、進路が限定され、将来像が閉ざされることはない。学力や学科カリキュラムといった点でみれば、かつてよりずっと進路選択の可能性は開かれている。進路選択は、生徒の意志に委ねられることになる。そういうと聞こえはよいが、これは混乱をひきおこしかねない。

高校生自身は、さまざまなメッセージから、地位達成よりも、個性にあった自己実現をする（ふさわしい仕事につく）よう煽られている。しかしそれが何か考えることは、はなかなか難しい。迷っても、進路が限定されるわけではないから、消去法で決めるわけにもいかない。その結果、高校生は将来展望を描きにくくなっている。大学全入時代のゆるやかさは、きびしさもはらんでいるのである。

大学全入時代は、高校生の進路選択を難しくしている。このような時代に、高校生の選択を後押しするのは何なのだろうか。なにが高校生の進路の規定因となっているのか探らねばならないだろう。まず考えられるのは、学費を負担できるかどうか、という経済的問題だろう⁸⁾。もしある学生が家計を理由に進学を早々にあきらめ、積極的にほかの進路を考えれば、こうした問題は表面に出てこない。経済的な問題を探るのならば、調査方法には工夫が必要と考えられる。つぎに考えられるのは、どのような学校イメージをもっているかである。Trow(1976)は、高等教育の量的発展段階とともに、質的変容がおこり、進学率50%をこえる段階では、進学が「義務」のように意識される、といった。だが、そうした状況とあわせて、その前段階である中等教育＝高校への進学率がきわめて高く、あたかも義務化したような状態が並立したとき、学校や進学の意味はさらに変容する。本稿のデータにおいて示されたように、高校生にとって「高校」は、学校生活を送る価値がクローズアップされていた。日常生活の場となった高校では、高校生はかつかつと地位達成をめどし、進路に思いをめぐらすということはすくないだろう。こうしたことは、それぞれの進路に関するイメージを貧弱にすると考えられる。イメージがあいまいならば、それがどのようなものを捉えるだけでは足りない。イメージの形成過程まで踏み込んで検討する必要があるだろう。

<註>

- 1) 日本私立学校振興・共済事業団による「平成15年度私立大学・私立短期大学入学志願動向（速報）」に基づく。2001年度入試において、定員割れをおこしていた全国の四年制私立大学は439校中149校で、30.2%。そのうち充足率50%未満の大学数は22校。短期大学では245校で約半数。うち充足率が50%未満の短大数は48校。
- 2) 英語科にいたったものは、英語科と国際教養科である。国際教養科という名前ではあるが、教育内容は英語教育がメインで「国際理解」という授業でも英字新聞の読解などを行っているので、英語科に分類した。農業系学科にいたったものは、微生物科・総合園芸コース・園芸デザインコース・草花コースをまとめたものである。旧農業高校が母体となっている。産業系学科は商業科・情報処理コース・機械システムコース・電子情報コース・環境科学コース・デザインコース・建設コースをまとめたもので、産業高校や工業高校、また旧・産業・工業高校などである。農業系学科・産業系学科はすべて戦前に設立された高校である。
- 3) 「高校ランク」は、中学のときの成績・高校の進学実績などを考慮して、便宜上、五段階で設定した。具体的にはランクⅠの高校は東大・京大などを含む、国公立大学に多く進学している、いわゆる地域の名門校である。それに対し、ランクⅤの高校は、かつてのいわゆる職業高校を中心としている。3割ほどが多様な進学機関へと進学しているが、専門学校などへ進学する割合が高く、大学・短大などの高等教育機関への進学は1割ほどである。
- 4) 表は欠損値を含んだ結果を表記しているが、相関係数（イータ）の算出にあたっては、欠損値を除外し、「高

校ランク」ごとに、大(一般)・大(推薦)・短大・専・各・就職と成績との相関をみた。

- 5) 表に併記したように、 χ^2 検定は1%水準において有意だった。また、大学進学希望者を4、短大と専・各希望者を2として、15分刻みで集計した家庭勉強時間とのピアソンの積率相関をみると、 $r = .31$ で1%水準において有意だった。
- 6) ただし、耳塚(2000)、荒牧(2001)は経年変化を重視し、両者とも2時点間比較調査を用いている。そのため、本稿で用いた調査と違い、専門高校を含むもののサンプルが上位校・中位校に偏っている。
- 7) 家計が学費を負担できるかどうか等は、進路意識に大きな影響を及ぼすと考えられるが、本稿は変数上の制約から取扱うことができなかつた。本データにおいて、大学・短大・専・各の進学を希望する生徒は1、それ以外の進路を選んだ生徒は0として、各府県の大学・短大・専・各の収容可能人数とピアソンの積率相関をみたところ、 $r = .21$ で、1%水準において有意であった。自分がある府県に、つまり身近に進学機関があるほど、進学を希望する傾向がある。こうしたことから考えても、経済的要因は考慮する必要があるだろう。
- 8) フリーター希望者は、興味深い特異な傾向を示している。だが、高校生全体の進路について考察するという本稿の目的から、全体のうち1.6% (50名) にすぎないフリーター希望者についての分析は除外した。詳しい分析は今後の課題とした。

<参考文献>

- 荒川(田中)葉(2001)「高校の個性化・多様化政策と生徒の進路意識の変容－新たな選抜・配分メカニズムの誕生」『教育社会学研究』第68集 167-185頁
- 荒牧草平(2001)「学校生活と進路選択－高校生活の変化と大学・短大進学－」尾嶋史章編『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房 63-80頁
- 秦政春(1979)「高等学校格差と教育機会の構造」『教育社会学研究』32 67-79頁
- 秦政春、片山悠樹、西田亜希子(2004)「現代高校生にとつての「高校」」『大阪大学人間科学部紀要』第30巻 113-142頁
- 藤田英典(1980)「進路選択のメカニズム」山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択－高学歴時代の自立の条件』有斐閣選書 101-129頁
- 荻谷剛彦(2002)「学習時間の変化」樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版 149-164頁
- 菊池栄治(1986)「中等教育における「トラッキング」と生徒の分化過程－理論的検討と事例研究の展開」『教育社会学研究』第41集、136-150頁
- Martin Trow (1972=1976) 天野郁夫訳「高等教育の大衆化－量的発展と質的変容」『高学歴社会の大学』東京大学出版会 3-52頁
- 耳塚寛明(1980)「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』第35集 111-122頁
- Rohlen, Thomas (1983=1988) 友田泰正訳『日本の学校－成功と代償』サイマル出版会
- 武内清(1983)「現代高校生の下位文化－四校の調査から」岩木秀夫・耳塚寛明編『現代のエスプリ 高校生－学校格差の中で』195 79-88頁
- 米川英樹(1978)「高校における生徒下位文化の諸類型」『大阪大学人間科学部紀要』第4巻 185-208頁

High School Students' Thoughts on Their Career / Educational Course in the Time of Universal-Access to Higher Education

NISHIDA Akiko

The situation of Japanese high school students has changed. On the one hand, the percentage of students who get employed after graduation has dropped remarkably. On the other hand, the percentage of students who go on to higher education, especially to the university, has risen. At the present time, half of the high school students go on to higher education. It can be said that the time of universal access to higher education already has come. Under these circumstances, how is the perception of high school students changing?

The major findings are summarized as follows:

- (1) More students with poor grades have begun to aspire to go to university.
- (2) There are few differences between the students who intend to go to college and the students who intend to find work as far as their attitude to study and adjustment to school life are concerned.
- (3) The students who intend to go on to university and the students who intend to find work choose the same reason for their course selection. That is, "I want to find something that suits my personality". There are a lot of students who have not decided what to do in the future.

The influence of 'tracking system' on high school students is weaker in the time of universal access to higher education. So high school's power to allocate a student a social position through the 'tracking system' has weakened. High school students' adjustment to school has improved, because high school doesn't place the loser's label on non-elites. However, high school doesn't give the students the label of the victor, either. Moreover, high school students receive messages that they have to express their individuality. They don't want to become the elite, but they want to find the suitable occupation for themselves. As a result, high school students don't picture the image of the future easily. It is the problem that high school students have in the time of universal access to higher education.